

# JSPS Stockholm News Letter

2014 Autumn



Vol. 44

## Prologue 01 デンマークの夢

2014年ノーベル賞受賞者の発表 / 2014年KVA-JSPSセミナーの開催 / スウェーデン同窓会セミナーの開催 / New Biology and Technologies in Medical Scienceの開催 / リトアニア Life Science Baltics 2014シンポジウムへの出席 / スウェーデン-京都大学共催シンポジウムの開催 / Denmark-Japan Workshop on Bioenergyへの出席他 / ウプサラ大学・東京工業大学合同シンポジウムの開催 / 第1回在フィンランド日本人研究者ネットワークミーティングへの出席 / 北海道大学、トウルク大学、サンクトペテルブルク大学合同セミナーの開催 / Japan-Denmark Scholarship Informationの開催 / デンマーク同窓会設立準備会合の開催 / 理化学研究所-カロリンスカ医科大学SciLifeLab合同シンポジウムの開催 / 北海道大学触媒化学研究センター・ストックホルム大学合同シンポジウムへの出席 / The 3rd Sweden-Japan Academic Networkの開催

## News 02

## Reports 07

第1回・第2回KVA-JSPSセミナー報告 / スウェーデンÖrebro大学におけるシンポジウム講演 / スウェーデンでの若手交流セミナー / 「Sweden-Kyoto Symposium」に参加して / ウプサラの猫たち / 第1回在フィンランド日本人研究者ネットワークミーティング / コラム～Alla helgons dagー死者に祈りを捧げる日 / その他打合せ・来会等

## Academic Information 19

ノーベルウィークダイアログについて / ノーベルウィークスケジュール決定 / 前スウェーデン王立科学アカデミー事務総長 旭日重光章受章 / スウェーデンのダブルディグリープログラム支援 / ウプサラ大学が東京で同窓会イベントを開催 / フィンランド 就学期間が長い国 / デンマーク政府 2015年の研究・開発経費の割り当てに合意 / ノルウェーリサーチカウンシル 新たな戦略を検討中 / NordForskが保健福祉に関する研究への助成を発表 / KI Bladet

## Notice 23

事業のご案内  
カロリンスカ医科大学同窓会 会員募集  
JSPS Stockholm News Letter 定期購読

## デンマークの夢

JSPSストックホルム研究連絡センター長 阿久津 秀雄

オーデンセの夕暮れは9月にしては暖かく、空気が澄んでいた。この町はコペンハーゲンがあるシェラン島とユトランド半島の間にあるフン島に位置し、1000年以上の歴史を持つという。アンデルセンの生まれ故郷にふさわしく古い街並みには童話の世界の雰囲気が漂っていた。アンデルセン（1805-1875）はここで鬱屈した人生のスタートを切ったという。彼の生家、育った家、通った学校等が残っているが、彼の幼少から少年時代にかけての心の軌跡を辿るのは難しい。近くに古道具屋があり、屋根裏には昔の遊具やアラジンのランプらしきものを並べてあるが、19世紀の初めに戻る助けとはならない。アンデルセンの童話には彼のオーデンセでの生活が投影されているため暗いと言われる。彼はどのような思いを抱いてここを出て行ったのであろうか。その当時、デンマーク王国自身も暗く、つらい時代を迎えていた。

オーデンセを訪れたのはデンマーク科学技術開発庁（DASTI）が主催する”Danish-Japanese Workshop on Bioenergy”に参加するためである。このワークショップは今のデンマークの明るい雰囲気を反映していた。ワークショップの背景にはデンマークの野心的なエネルギーシステム構築計画がある。よく知られているように、デンマークは1970年代の石油ショックの後、国民的議論を経て原子力発電を利用しないエネルギー自立を1985年に選択し、1990年に再生可能エネルギーを主要エネルギー源と位置づけた。それに基づいた取り組みにより2011年時点でエネルギー自給率は100%を越えており、使用エネルギーに占める再生可能エネルギーの割合も約22%まで上がっている。特徴的なのはそのうち約70%がバイオエネルギーだということである。このワークショップで学んだところによればデンマークが得意とする酪農等がこれに寄与している。農業関係の廃棄物を用いた発電、家禽の糞やさまざまな関連廃棄物を生物的に処理したバイオガス生産が行われている。デンマークでは熱電併給（Combined Heat and Power Production, CHP）が普及しており、発電やガス生産で発生する熱は地域暖房に使われている。再生可能エネルギーの主力と位置づけられている風力発電は気象条件によって発電量がかなり変化する。しかし、バイオマスを使うと天気によらず、安定的にエネルギーを供給できる。特に電力は貯蔵できないので再生可能エネルギーによる電力の安定供給にはバイオエネルギーが重要な役割を果たすと考えられる。デンマーク政府は発電で現在（2013年）32%を占めている風力を2020年までに50%にし、これをさらに引き上げて2050年までには全使用エネルギーを化石燃料フリーにすることを目指している。最終的には風力とバイオエネルギーを全使用エネルギーの柱とする計画である。問題はバイオエネルギーのコストダウンと余剰電力の貯蔵法の開発である。このために知恵を絞ろうという試みの一つが今回のワークショップなのであろう。参加した日本の研究者によれば、政府の重点的支援もあってデンマークのバイオエネルギー研究は世界をリードする高い水準にある。

化石燃料脱却はまさに夢のプロジェクトである。しかし、これからは未知の領域も多く、茨の道が待っている。今後はこの計画の強みである国民の直接的関与も重要な役割を果たすであろう。エネルギー生産拠点であるCHPの数は2012年で大規模16に対して小規模665、さらに地域暖房が230ある（農林金融2012:10, 坂内久）。数の上では圧倒的な小規模・零細施設は地域住民団体、地方自治体や私企業が運営するもので、地域に張り巡らされたローカルグリッドである。これは政府主導の大規模グリッドを補完する柔軟で効率の良い補助グリッドとなっている。このような住民参加が再生可能エネルギーへのコスト負担意識を含めた動力になっていると考えられている。国民の意識を反映してエネルギー使用量の抑制も効果的で、経済規模の拡大にもかかわらず、エネルギー総使用量は1995年頃からほとんど変わっていない。

2011年の福島原子力発電所事故以降、ドイツその他のヨーロッパ諸国が再生可能エネルギーを主要エネルギー源とする流れに加わった。しかし、デンマークは30年の先行キャリアーに自信を持っており、DASTIは開発している再生可能エネルギー技術には大きな市場があると考えている。アンデルセンが活躍した時期、デンマークはナポレオン戦争、シュレスヴィッヒを巡る紛争でどん底にあった。そこから立ち上がって、今日の繁栄を作り上げたデンマーク魂がこの大プロジェクトを動かしているのかもしれない。オーデンセはバイオマス専用電熱供給プラントがいち早く設置された場所であり、再生可能エネルギー化の先端を走っている。マッチ売りの少女が夢を託したマッチの火は再生可能エネルギーとなってデンマークの夢を写し出している。



## 2014年ノーベル賞受賞者の発表

2014年10月、ノーベル賞受賞者の発表が行われ、物理学賞は、明るく、省エネルギーの白色光源を可能にした効率的な青色発光ダイオード(LED)を発明した功績により、赤崎勇氏(名城大学終身教授及び名古屋大学名誉教授)、天野浩氏(名古屋大学教授)、中村修二氏(カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授)の三氏に授与されることが決定した。青色発光ダイオードは、効率的で環境に優しい光源で、この発明がLEDランプの普及につながり、人類に対する大きな恩恵をもたらしたことが評価されている。

受賞者の一人の赤崎勇氏は、2014年5月21日に、当センター、IVA、瑞日基金、在スウェーデン日本国大使館、日本化学会、名城大学共催の2014年度第1回IVA-JSPSセミナーにおいて、「Blue LED, scientific breakthrough with real world impact」をテーマに講演されている。セミナーにはスウェーデン各地から多くの研究者が参加し、参加者は青色LED研究の歴史に関する講演に熱心に耳を傾けていた。

(セミナーの詳細と名城大学上山智教授によるレポートを、JSPS Stockholm News Letter 第43号に掲載している。)

生理学・医学賞は、「脳の空間認知をつかさどる細胞の発見」により、John O' Keefe氏(米)、May-Britt Moser氏(ノルウェー)及びEdvard I. Moser氏(ノルウェー)の三氏に、化学賞は、「超解像蛍光顕微鏡」を開発したEric Betzig氏(米)、Stefan W. Hell氏(独)及びWilliam E. Moerner氏(米)の三氏に贈られることとなった。

また、文学賞は、「理解し難い人間の運命を再現し、占領下の生活を描いた記憶の芸術」によりPatrick Modiano氏(仏)に、平和賞は、「子供や若者への抑圧に反対し、すべての子供の教育を受ける権利のために闘ってきた活動」により、Kailash Satyarthi氏(印)、Malala Yousafzai氏(パキスタン)に、経済学賞は「市場の力と規制の分析に関する功績」により、Jean Tirole氏(仏)に贈られることとなった。

受賞者には800万スウェーデンクローナ(約1億1千8百万円)が贈られ、授賞式はアルフレッド・ノーベルの命日にあたる12月10日に行われる予定である。なお、共同受賞の場合は、賞金は功績に応じて按分される。(他ノーベルウィーク関連の情報を、p.19に掲載)



ノーベル物理学賞の発表  
(2014年10月7日於スウェーデン王立科学アカデミー(KVA))

## 2014年KVA-JSPSセミナーの開催

当センターは2009年度からスウェーデン王立科学アカデミー(KVA)との共催で、当地で関心が高い研究業績を有する日本の研究者の講演会を企画・開催している。本年度第1回、第2回の開催実績は以下のとおりである。

### 【第1回】

理化学研究所創発物性科学研究センター長及び東京大学大学院工学系研究科物理学専攻教授である十倉好紀教授を招聘し、2014年8月21日にウプサラ大学、8月25日にシャルマーシュエーデン工科大学において、Magnetism and Topologyをテーマに講演いただいた。同セミナーには多くの研究者や、学生が集まり、講演に熱心に耳を傾け質疑応答も活発に行われた。また、十倉教授は8月22日に森元誠二在スウェーデン日本国大使館特命全権大使を表敬訪問され、阿久津JSPSストックホルム研究連絡センター長とともに、日瑞の学術交流に関する意見交換を行った。

(p.7に十倉教授による報告を掲載)

### 【第2回】

京都大学大学院・文学研究科の落合恵美子教授を招聘し、2014年9月16日にエレブロ大学、9月17日にストックホルム大学において、Family, Gender and the Public and Private Spheresをテーマに講演いただいた。同セミナーには様々な国籍の研究者や学生が集まり、講演に熱心に耳を傾けた。ストックホルム大学でのセミナー前に、JSPSストックホルム研究連絡センターが主催した昼食会には、同大学社会学部長のProf. Lars Udehn他8名のセミナー関係者や同学部の研究者が参加し、研究内容についてディスカッションが行われた。

9月15日には、在スウェーデン日本国大使館にて大使表敬を行い、スウェーデンと日本における家族やジェンダーについて森元誠二在スウェーデン日本国特命全権大使と意見交換を行った。

(p.8に落合教授による報告を掲載)

## スウェーデン同窓会セミナーの開催

2014年8月28日に、エレブロ大学において微量環境汚染物質の測定技術開発やモニタリングに関連する分野をテーマとしたJSPSスウェーデン同窓会セミナー"New Technologies and Results for the Analysis of Persistent Pollutants and Pharmaceuticals in the Environment."が開催され、日本から高橋真愛媛大学准教授と高菅卓三島津テクノリサーチ執行役員・愛媛大学客員教授が、スウェーデンからはSWETOX(Swedish Toxicology Sciences Research Center)、ウプサラ大学、エレブロ大学から8名の研究者や博士課程学生が講演と質疑応答を行った。

本セミナーには、北欧諸国の研究者のみならず、アジア諸国からの留学生も多く参加し、セミナー後には講演内容に関して意見交換を行う姿が多く見られた。(p.9に高橋准教授による報告を掲載)

## New Biology and Technologies in Medical Scienceの開催

日本とスウェーデンで基礎医学研究の新しい流れを開拓しつつある若手研究者の交流を図ることを目的に、宮澤恵二山梨大学教授、今村健志愛媛大学教授が若手研究者5名を引率して「医科学領域における新しい生物学と研究技術」をテーマとしたシンポジウムやセミナーを開催した。詳細は以下のとおりである。

### 「Symposium on Molecular Biomedicine」

(2014年9月2日、於ウプサラ大学)

ウプサラ大学側代表者のProf. Aristidis Moustakasによる開会挨拶に続き、阿久津秀雄JSPSストックホルム研究連絡センター長によるJSPS事業紹介が行われた。その後、日本側若手研究者3名、ウプサラ大学側若手研究者4名のスピーカーによる講演と質疑応答が行われた。ウプサラ大学側からは約30名の学生・研究者が出席し、活発な意見交換の場となった。

### 「Mini Symposium New Biology and Technologies in Medical Science」

(2014年9月4日、於カロリンスカ医科大学)

阿久津センター長による開会挨拶とJSPS事業紹介に続き、日本側若手研究者5名、カロリンスカ医科大学側若手研究者3名のスピーカーによる講演と質疑応答が行われた。

セミナー前に開催された当センターの主催の昼食会では、日本側参加者、カロリンスカ医科大学側スピーカーと代表者のProf. Arne Östmanが互いの研究内容や経歴について情報交換をし、セミナー時には互いの研究内容について踏み込んだ議論を行った。

### 「Young Scientist Seminar on Molecular Biomedicine」 (2014年9月5日、於ルンド大学)

ルンド大学側代表者のProf. Kristian Pietrasからルンド大学とセミナー会場Medicon Villageについて紹介があった後、参加者全員が各自の研究内容と関心のある研究分野について発表するラウンドテーブルディスカッションの機会が設けられた。その後、日本側若手研究者2名、ルンド大学側若手研究者2名のスピーカーによる口頭発表と質疑応答が行われ、活発なディスカッションの場となった。

(p.10に宮澤教授と今村教授による報告を掲載)

## リトアニア Life Science Baltics 2014シンポジウムへの出席

2014年9月10日～12日に、リトアニア(ヴィリニウス)において、「Life Sciences Baltics Forum 2014」が、Enterprise Lithuania主催、リトアニア共和国首相及びリトアニア共和国経済省後援、Bioforum、Kareidoscopeの協力で開催された。

同国際フォーラムには、世界の第一線で活躍するバイオテクノロジー、薬学、医療技術の専門家が講演を行うと共に、関係企業がブースを設置し、30か国から800人以上が参加した。第一日目の全体会合にて、浅島誠JSPS理事が「Organogenesis and Regeneration Studies in Vertebrates Including Human Cells」と題した再生医療に関する講演を行い、聴衆は熱心に聞き入った。



浅島誠JSPS理事による講演の様子

## Sweden-Kyoto Symposium(スウェーデン-京都大学共催シンポジウム)の開催

2014年9月11日、12日の2日間、京都大学、ストックホルム大学、ウプサラ大学、スウェーデン王立工科大学(KTH)、カロリンスカ医科大学、当センターの共催による、合同セッションと10の平行セッションからなる大規模なシンポジウムが開催され、京都大学から55名、スウェーデンの大学から77名の講師が出席した。

1日目にストックホルム大学で開催された合同セッションでは、Astrid Söderbergh Widdingストックホルム大学学長、三嶋理晃京都大学理事・副学長、Kerstin Thamカロリンスカ医科大学副学長、Peter Gudmundsonスウェーデン王立工科大学学長、Eva Åkessonウプサラ大学学長による開会挨拶に続き、上記5大学の紹介が行われた。続いて、阿久津センター長が、JSPS事業紹介を行った。

また、Gunnar Anderssonストックホルム大学教授をはじめとする4名の講演者により、それぞれの研究に関する講演が行われた。

1日目終了後には、在スウェーデン日本国大使公邸においてレセプションが開催され、森元誠二在スウェーデン日本国大使館特命全権大使、阿久津センター長の他、レセプションに出席した各大学の学長、副学長やLars Vargö前駐日スウェーデン大使がスピーチを行い、今後の大学間の関係強化や日本-スウェーデン間の研究交流の発展について述べた。

当シンポジウムには、2日間でのべ150名を超す参加があり、両国の今後の教育・研究連携に向けた具体的な可能性を検討し合う貴重な機会となった。

(p.12に榎木教授による報告を掲載)

## Denmark-Japan Workshop on Bioenergyへの出席、デンマーク科学技術庁(DASTI)他との面談



Denmark-Japan Workshop on Bioenergy参加者

2014年9月12日、デンマーク・オーデンセにおいて、デンマーク科学技術開発庁(DASTI: Danish Agency for Science, Technology and Innovation)の主催により Denmark-Japan Workshop on Bioenergyが開催され、当センターから阿久津センター長と川窪副センター長が出席した。昼食時に阿久津センター長が、外国人特別研究員事業、二国間交流事業、Core to Core Program等のJSPS事業の説明と、9月26日にデンマークにて開催予定のJapan-Denmark Scholarship Informationの紹介を行った。

ワークショップ合間を縫って、DASTI、Innovations Fonden、在日本デンマーク王国大使館との会談も行った。会談では、各機関についてそれぞれ説明いただき、今後の協力について話し合った。

(p.1阿久津センター長執筆のプロローグで、Denmark-Japan Workshop on Bioenergyについて触れている。)



DASTI及びInnovations Fonden関係者との写真

## ウプサラ大学・東京工業大学合同シンポジウムの開催

2014年9月16日と17日の二日にわたり、ウプサラ大学オングストローム研究所において、ウプサラ大学、東京工業大学、当センターの共催によるシンポジウムが開催された。

本シンポジウムはウプサラ大学と東京工業大学の複数の研究者の交流を契機とし、両大学が全学を挙げて企画したもので、物理、材料科学、環境、生命科学までの幅広い研究分野を対象とした横断的な全学シンポジウムを開催することにより、両大学の連携強化を図ることを目的としている。

シンポジウムのオープニングセッションでは、Eva Åkessonウプサラ大学学長による開会挨拶に続き、三島良直東京工業大学長による同大学の紹介と、両大学の今後の研究協力に対する期待を込めたスピーチがあった。また、阿久津センター長が挨拶とJSPS事業紹介を行い、前Nobel committee vice-rector兼chairmanのProf. Joseph Nordgrenが

“Tools for Quality in Science – Faculty, Academy and Infrastructure”をテーマに基調講演を行った。

セッションでは、東京工業大学・細野秀雄教授による“Discovery of Iron-based Superconductors and Creation of RT-stable Electride”をテーマとした講演をはじめ、東京工業大学より計12名、ウプサラ大学より計16名の講師による講演とディスカッションが行われた。

クロージングセッションでは、研究者間の共同研究のMOUの締結や全学研究交流協定に向けたLOIの締結が行われ、2015年度以降もより一層の協力関係を推進していくことについてそれぞれ期待が述べられた。

(p.14に東京工業大学辰巳敬理事・副学長による報告を掲載)

## 第1回在フィンランド日本人研究者ネットワークミーティングへの出席

2014年9月18日に、ヘルシンキ大学文系キャンパスにて、在フィンランド日本大使館、北海道大学ヘルシンキオフィス、当センターの共催で、ネットワークミーティングが開催された。ミーティング冒頭には、三輪芳明在フィンランド日本国大使館一等書記官、田畑伸一郎北海道大学ヘルシンキオフィス所長、川窪百合子JSPSストックホルム研究連絡センター副センター長が、それぞれ開会挨拶を行った。

本ネットワークミーティングには、ヘルシンキ内外から計45名の研究者が参加し、同分野の研究者同士のみならず、異分野の研究者同士も互いの研究内容について情報公開を行う機会となった。

(p.15にヘルシンキ大学伊藤早苗氏による報告を掲載)

## 北海道大学、トゥルク大学、サンクトペテルブルク大学合同セミナー等の開催

2014年9月22日に、フィンランド・ヘルシンキ大学において、極北研究を進める上でフィンランド、日本、およびロシアの協力をどのように進めるかを話し合う会議が北海道大学の主催、在フィンランド日本大使館、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で開催された。冒頭に篠田研次在フィンランド日本国大使館特命全権大使の挨拶があり、それに引き続き、Lauri Ojalaフィンランド・トゥルク大学教授、Konstantin Krotovロシア・サンクトペテルブルグ大学准

教授、田畑伸一郎北海道大学教授からそれぞれの研究機関の紹介と北極圏研究への取り組みが報告された。ヘルシンキ大学もゲストとして参加した。引き続き、田畑教授が代表者であるフィンランド・日本の二国間プログラム

“Russia’s final energy frontier- Sustainability challenges of the Russia Far North”のキックオフミーティングが開催され、3大学と連携しつつ共同研究を発展させていくことで合意した。会議参加者は大学院学生も含めて18名であった。

## Japan-Denmark Scholarship Informationの開催

2014年9月26日にデンマークのコペンハーゲン大学において、在デンマーク日本国大使館、東海大学デンマーク同窓会、当センターの共催で、各機関の同窓会会員や日本留学に興味を持つ学生・研究者を対象とした交流会が開催された。

本交流会は、参加者に対して各機関の奨学金やJSPS外国人特別研究員制度を紹介することを目的としており、各機関による事業説明と、各機関の留学プログラム経験者によるプレゼンテーションが行われた。

【各留学プログラム経験者によるプレゼンテーションの様子】



阿久津センター長による  
事業説明



元JSPS外国人特別研究員  
Michael Arvedlund氏



東海大学同窓生兼医学生  
Louise Find氏



元文部科学省国費留学生  
Camilla Nellemann氏



## デンマーク同窓会設立準備会合の開催

2014年9月26日にデンマークのコペンハーゲン大学において、デンマーク同窓会設立の可能性を見出すことを目的とした準備会合が開催され、現地のJSPS外国人特別研究員経験者8名が参加した。はじめに、川窪副センター長より同窓会組織の概要・目的と、JSPS外国人特別研究員制度経験者を対象に行った同窓会設立に関するアンケート結果の説明があり、この内容に基づいて参加者による議論が行われた。

ボードメンバーの任期は最初は1年とし、第1回総会で選挙を行った後は任期を3年とすることや、総会は毎年1回開催することなどの提案があり、今後、規程を調整していくこととした。また、ボードメンバーは右記の者に決定し、Sam K. Steffensen氏がChairに、Michael Arvedlund氏がVice-chairに選出された。同窓会名は“JSPS Alumni Club Denmark”に決定した。

＜ボードメンバー＞

- Chair: Sam K. Steffensen博士  
(Innovisor (企業) 所属)
- Vice-chair: Michael Arvedlund博士  
(Akva Group (企業) 所属)
- Eugen Stamateデンマーク工科大学研究主幹
- Carl Winsløw コペンハーゲン大学教授
- Maher Abou Hachemデンマーク工科大学准教授
- Anemone Platz オーフス大学准教授

## CLST/RIKEN-Karolinska Institutet-SciLifeLab Joint Symposium (理化学研究所-カロリンスカ医科大学SciLifeLab合同シンポジウム)の開催

2014年10月16日に、カロリンスカ医科大学Gamma conferenceにおいて、理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センター(CLST)及びカロリンスカ医科大学SciLifeLabの共催による、“New Era of Life Science”をテーマとした合同シンポジウムが開催された。本シンポジウムは、Molecular Imaging、Genomics、Molecular Regulationをそれぞれテーマにしたセッションで構成されており、理化学研究所からは渡辺恭良ライフサイエンス技術基盤研究センター長をはじめとする7名、カロリンスカ医科大学からは6名の講師が講演を行った。阿久津センター長がJSPSの事業説明を行い、参加学生や研究者に対して、外国人特別研究員制度や同窓会活動、BRIDGEプログラム等の紹介を行った。



阿久津センター長による事業説明

## CRC-SU Joint International Symposium on Chemical Theory for Complex Systems (北海道大学触媒化学研究センター・ストックホルム大学合同シンポジウム)への出席

2014年10月30日、31日、ストックホルム大学において、北海道大学触媒化学研究センター(CRC)とストックホルム大学有機化学科との共催で、触媒化学の関連分野を対象としたシンポジウムが開催された。本シンポジウムは、日本の研究業績の発信と海外の大学との文化交流を図る事を目的に、北海道大学触媒化学研究センターが2013年より開始したシンポジウムで、第1回はフランス・ストラスブールにおいて、第2回はアメリカ合衆国のアトランタにおいて開催

されてきた。

第3回目となる今回は、平成24年度文化功労者の諸熊奎治京都大学福井謙一記念研究センターフェロー、春田正毅首都大学東京教授をはじめとする4名の講師による基調講演と、両大学内外からの15名の講師による密度の濃い集中した講演が行われた他、1日目の終わりにはポスターセッションも開催され、参加者は活発な意見交換を行った。

## The 3rd Sweden-Japan Academic Networkの開催



中嶋ウプサラ大学教授による基調講演

会場内では、在スウェーデン日本国大使館、ストックホルム日本人会、当センターがブースを設置し、各機関のイベントや奨学金制度等について関心のある参加者からの質問を受け付けた。

基調講演後は、参加者が各ブースでの情報収集や他の研究者との意見交換を積極的に行うなど、盛況のうちに会合は終了した。(報告は次号(45号)に掲載予定)

2014年11月13日に、スウェーデン王立科学アカデミー(The Royal Swedish Academy of Science(KVA))において、当センター、KVA、在スウェーデン日本国大使館との共催で、両国の学術交流の促進・交流を目的とした会合が開催された。

Barbara Cannon KVA長官、森元誠二在スウェーデン日本国大使館特命全権大使による開会挨拶に続き、中嶋正之ウプサラ大学教授による基調講演“My Game Research in Sweden for a Bridge between Japan and Sweden”が行われた。

本会合はスウェーデンの日本人研究者、JSPS事業経験者、国費留学生、日本との交流活動に関心のあるスウェーデン人研究者を対象に、2012年より開催しており、現地における関心も高く、3回目となる今年は100名を超える参加者が集まった。



参加者同士の交流の様子

## KVA-JSPS セミナー報告

理化学研究所 創発物性科学研究センター センター長 十倉好紀

KVA と JSPSのお招きで、8月21日にウプサラ大学で、8月25日にはチャルマース工科大学でKVA-JSPSセミナー講演する機会を得ました。ウプサラ大学では、ちょうどこの年初に名誉博士学位を頂くために来ていたのですが、一面の銀世界であった冬の博士授与式の折とは対照的な夏の美しい街並みも感慨深いものでした。同大学では、ホストのClaes-Göran Granqvist教授と日本では私の研究の同僚でもあったRoland Mathieu准教授の周到的な準備でセミナーが開催され、まず、JSPSストックホルム研究連絡センター長の阿久津先生のご挨拶とJSPSのプログラムの紹介の後、「磁性とトポロジー」というタイトルで講演を行いました。

講演の内容は、簡単には次のようなものです。磁石（強磁性体）をはじめとする物質の磁性は、多くの興味深い物理と重要なエレクトロニクスへの応用が展開されています。磁性体の中のミクロな磁化（スピン）の分布が特有の幾何学的形状（トポロジー）を持つことによって、そこでの電子系が従来では知られなかったような巨大な電磁応答を示すことが分かり始めています。たとえば、何万個もの原子上のスピンが集団として渦巻き形状を持った「スキルミオン」という新しい「ナノ粒子」を生じせしめ、これが電流で簡単に駆動できたり、電子に巨大な仮想磁場を与えたりする現象です。

このような新しい物性科学の流れを、スウェーデンの物理学研究者、材料科学研究者と共有する機会を持ちたいと思っておりましたが、お陰さまで、活発な質疑もあり、また、昼食をはさんでウプサラ大学のオングストローム研究所の研究者の方々とも貴重な意見交換ができました。

また、正式なセミナーではありませんが、翌日には、ストックホルム工科大学（KTH）でも、開催中の国際ワークショップに飛び入りの形で講演の機会を得ました。NORDITAのAlexander Balatsky教授とKTHのDavid Haviland教授には、この講演のお世話を頂いた上に、大変有益な議論も頂きました。

週明けには、ヨーテボリのシャルマーシュ工科大学でも、Tord Claesson教授のお世話で、同じタイトルの講演を行いました。更に午後は、Claesson教授が同大学の関連研究者を集めてミニシンポジウムを開催して下さい、そこでも、「スキルミオンの制御」に関する話題を提供し、また出席した多くの研究者と有益な議論と会話と楽しみました。

研究の話ばかりを述べましたが、実際には週末をはさんで、スウェーデンでの滞在も満喫させていただきました。Claesson先生ご夫妻はじめ、スウェーデンでの古くから知己のお陰です。また在スウェーデン日本国大使館での訪問では、森元大使、佐藤一等書記官、JSPS阿久津センター長ともスウェーデンとの学術交流についても楽しい意見交換の場を頂きました。すでに、ウプサラ大学からは、理研では博士学生の研究滞在の受け入れを行っていましたが、今後、益々、両国の学術交流が深まることを念じております。最後になりましたが、スウェーデンでの講演旅行が大変充実したことになりましたことを、お世話頂きましたJSPSストックホルム研究連絡センターの阿久津センター長、川窪副センター長、大江様に感謝致します。



## 第2回KVA-JSPSセミナー報告 ジェンダーと社会的イノベーション：日本とスウェーデンの女性たちをつなぐ

京都大学文学研究科 教授 落合恵美子

スウェーデンは社会的イノベーションの先進国である。KVA-JSPSセミナーに先立ち、9月15日に表敬訪問に伺った日本大使館では、貴重なお時間をおとくださった森元誠二大使から、早速興味深いお話をうかがった（写真1）。スウェーデン在住の日本人は女性が圧倒的に多いというのである。ジェンダー平等の進んだスウェーデンに憧れた日本女性がさまざまなかたちで移り住んだのだろう。

スウェーデンはジェンダー研究、とりわけフェミニストの視点からの社会政策研究の最先進国でもある。フェミニズムの学問研究における最大の貢献はフェミニスト福祉国家論研究の分野であったとわたしは考える。物ばかりではなく人々の生命や生活が再生産できなければ社会は維持できないが、そのための活動は多くの社会で女性が担い、GDPにも入れられず、社会科学的研究の対象からはずされていた。しかし高齢社会が到来し、そうした活動も可視化して合理的に遂行しなければ社会が回らない時代となった。女性の視えない活動から出発するフェミニスト社会科学は、女性の人権のためだけでなく、持続可能な社会の再編成を提案するという極めて現実的な役割を果たした。北欧社会が高い出生力を保っているのはその成果である。そのフェミニスト社会科学の中心地で学ぶため、わたしは2010年にもストックホルム大学に客員教授として滞在したことがあるが、そのときに知己を得たエリザベス・トムソン教授にホストとなっただき、今回のKVA-JSPSセミナーが実現した。

1回目のセミナーは、ストックホルムから内陸へ2時間ほど入ったところにあるエレブロ大学で9月16日に実施した。ジェンダー研究の拠点のひとつであり、ポーランド、ノルウェー、エストニアなどから集まっている大学院生たちと交流の機会を設けていただいた。ノルウェーから来ている40代くらいの学生がちょうどその日に博士論文を柱に打ちつけるセレモニーをしたところだと言う。スウェーデンでは博士論文を公開するという意味で、柱に釘で打ちつける習慣があるのだそうだ（写真2）。わたしのセミナーは

Asian Familialism Reconsidered: Comparative Studies of Care Regimes in Asiaというタイトルで、アジアの9カ国の研究者の共同研究の成果に基づき、「アジアでは伝統的にケアは家族、特に女性が担ってきた」としばしば語られる「常識」に反証を加える、というものであった。初めて聞くことばかりだという感想をいただき、二つの地域をつなぐ役割を少しでも果たせたかな、と思った。

2回目のセミナーは、ストックホルム大学で9月17日に実施した（写真3）。社会科学および人口学ユニット（SUDA）の教員、研究者、大学院生が参加してくれた。政治学科のダイアン・セインズベリ名誉教授が社会科学のバーバラ・ホブソン教授と共に出席してくださったのは大きな喜びだった。お二人ともフェミニスト福祉国家論の立役者である。わたしのセミナーはThe Transformation of the Intimate and the Public in European and Asian Modernity と題したもので、1970年代以降の日本ではなぜ同時期の欧米圏同様なジェンダー平等の進展が見られなかったのかという問いを立て、1980年代の政治的選択がその後の改革の障壁となったことを示した。現在の東アジアでは家族の責任が重いのかえって家族を作ることを避ける「家族主義的個人化」が起きている、反対に福祉国家が個人を支える仕組みができていたヨーロッパでは「個人主義的家族化」とも言える家族の復権が起きているというわたしの指摘に、北欧における結婚ブームについて研究している大学院生が賛意を表してくれるなど、興味深い意見交換ができたと思う。

セミナーの合間を縫って、ストックホルム大学社会科学のカール・レグランド教授にお願いして、奥様のレグランド塚口淑子さんのお墓参りに連れて行っていただいた（写真4）。淑子さんは冒頭に書いたような日本女性の代表のような方であり、『女たちのスウェーデン』『スウェーデンモデルは有効か』などのご著書を通して、日本とスウェーデンの特に女性たちをつなぐ先駆的役割を果たしてくださった。緑に包まれた公園墓地に眠る淑子さんに、両国民の交流のますますの発展を見守っていただけるようにお願いした。



（上：写真1、右：写真2）



（上：写真3、右：写真4）



## スウェーデンÖrebro大学におけるシンポジウム講演

愛媛大学農学部附属環境先端技術センター 准教授 高橋真

スウェーデンÖrebro大学のBert van Bavel教授の招きをうけて、本年8月28日に同大学で開催されたシンポジウム“New technologies and results for the analysis of persistent pollutants and pharmaceuticals in the environment”で講演する機会をいただいた。このシンポジウムは、van Bavel教授らの研究グループが微量環境汚染物質の測定技術開発やモニタリングに関して、これまで日本の大学や企業と多くの共同研究や国際交流を行ってきた過去25年間の記念事業として開催されたものである。また今回のシンポジウムでは、SAC Activity Seminarとして、これまでJSPSの国際交流・人材育成事業で支援を受けた研究者らが講演を行った。van Bavel教授は、ダイオキシン類やPCBなどの残留性有機汚染物質（POPs）の微量分析、とくに各種質量分析装置等を用いた機器分析法の開発や国際クロスチェック、モニタリングプロジェクト等において、数多くの成果を挙げてきた著名な研究者である。スウェーデンは、POPs研究の分野において多くの先駆的研究者を輩出し、また地球規模でのPOPs汚染拡大を抑制するための「ストックホルム条約」の採択がなされた国でもある。今回のシンポジウムへの参加は自身にとって初の訪瑞であるだけでなく、同国の研究環境や活動を知る非常に良い機会となった。

シンポジウムの開催にあたって、まず副学長代理のGunilla Lindström教授より、開会の挨拶およびÖrebro大学MTMリサーチセンターを中心とする国内外の環境研究プロジェクトの概要が紹介された。最近のPOPs研究におけるトピックの一つに、PCBなどの‘Legacy POPs’に加えて、臭素系難燃剤のPBDEsなどが‘New POPs’としてストックホルム条約の対象物質に加わった（あるいは候補物質として検討されている）ことがある。また、臭素系難燃剤の利用や含有製品の廃棄に伴って、‘臭素化’のダイオキシン類が発生することも注目されている。van Bavel教授や私の講演では、主にそれらNew POPsの測定技術の開発や最近の環境モニタリングの成果に焦点が当てられた。とくに自身の講演においては、愛媛大学がこれまで国際的な研究プロジェクトとして取り組んできた発展途上国の廃棄物処理活動に伴うPOPs問題、とくに臭素系難燃剤や臭素化ダイオキシン類に関する最新の調査結果を報告した。シンポジウムにはアジア諸国からの留学生や発展途上国をフィールドとする研究者も参加しており、公演後は国際的な環境研究の必要性や具体的なアイデアなどについて多くの意見が交わされた。

さらに招待講演者のJohan Lindberg博士が、スウェーデンの11大学が共同で運営・推進する学際的研究プロジェクト「SWETOX」について紹介し、化学物質のリスク評価に関する同国の先端的な研究戦略を説明した。またUppsala UniversityのSamira Salihovic博士は、スウェーデン人のPOPs曝露に関する影響評価について最新のメタボローム解析を用いた研究成果を報告した。POPsに限らず、多様化する化学物質のリスク評価・安全管理に関して、学際的な研究アプローチが今後ますます重要になってくることを認識するとともに、スウェーデン政府が掲げる「Non-toxic Environment」の実現に向けた具体的な研究活動の一端を知ることができた。シンポジウムの後半では、Örebro大学MTMリサーチセンターのJessika Hagberg、Anna Kärman両准教授および博士課程学生3名が臭素化ダイオキシン類や臭素系難燃剤、フッ素系表面加工剤などに関する分析技術や環境モニタリングに関して、最新の研究成果を発表した。シニアから若手の研究者、学生が加わって、先端的な研究成果を持ち寄り、活発な情報交換や議論が交わされ、自身にとっても大変楽しく、充実した時間を過ごすことができ、また今後の研究展開にとっても多くの示唆を得ることができた。

また、今回のシンポジウムには株式会社島津テクノロジーの高菅卓三博士が基調講演者として招かれた。高菅博士は、van Bavel教授やLindström教授が京都大学に来学して以来、20年近くにわたり研究交流を行っている（高菅博士はそれらの研究貢献によりÖrebro大学より名誉博士号を授与されている）。さらに高菅博士は愛媛大学客員教授として、筆者らの研究グループとNew POPs等に関する共同研究を行っており、基調講演ではそれら研究事例とともに、ダイオキシン分析の開発研究に係わる日瑞交流の歴史について紹介された。今回の私のÖrebro大学訪問においても同博士には多くの支援を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、今後も高菅博士はじめ国内外の研究者と協力し、よりよい研究ネットワークを作っていきたいと思う。また、今回の訪瑞にあたって私は高菅博士とともにBert・Gunilla夫妻（つまりvan Bavel・Lindström両教授）のご自宅に宿泊、滞在させて頂いた。郊外の自然豊かな場所にあるご自宅で、まさに心温まる歓待を受け、毎日が素晴らしい体験の連続であった（紙面の関係上、詳細をご紹介できないのが残念）。先端的な研究活動だけでなく、両先生の深いホスピタリティをスウェーデンの自然とともに感じることができたのが、今回の訪問における真の収穫であったと思う。両先生にはシンポジウム招聘から滞在まで、本当にお世話になった。心から感謝申し上げる。

またJSPSストックホルム研究連絡センターの阿久津秀雄センター長には、シンポジウム講演等を通して、今後の国際的な共同研究・学術交流の推進に向けて参考となる情報を多く頂いた。同センターの川窪百合子様、工藤奈津美様、タシママリカ様には、今回の訪瑞に際し、大変お世話になった。以上、関係者の方々に心よりお礼申し上げます。



## スウェーデンでの若手交流セミナー

山梨大学大学院総合研究部 教授 宮澤恵二  
愛媛大学大学院医学系研究科 教授 今村健志

私たちがウプサラ大学に留学していたのは20年前のことになりますが、帰国後もしばしばスウェーデンを訪れ、研究交流を続けてきました。特に、ここ数年はJSPSの先端拠点事業（代表者：東京大学医学系研究科・宮園浩平教授）の支援により、毎年のようにスウェーデンを訪れる機会をいただいています。私たちのスウェーデンへの思い入れは強く、国内の学会でシンポジウムを企画する時など、積極的にスウェーデンの研究者を招待してきました。このたび、JSPSのストックホルム研究連絡センターが声をかけてくださり、日本とスウェーデンの若手研究者が交流するプログラムを企画させていただきました。こうして、9月2日～9月5日、若手のPI（岡田峰陽：理化学研究所、武森信暁：愛媛大学プロテオミクスセンター）と助教（神谷真子：東京大学大学院医学系研究科、柴田佑里：東京大学医科学研究所、可野邦行：東北大学薬学研究科）の5名に同伴してスウェーデンの3大学を巡る旅が始まりました。

最初の目的地はウプサラ大学のBiomedical Centerです。ここでの合同セミナーでは、日本側から3名（神谷、可野、武森）、スウェーデン側から4名（Johan Kreuger、Anna-Karin Olsson、Ola Söderberg、Ingvar Ferby）が講演しました。ホストのAristidis Moustakas教授はギリシャの出身ですが、セミナーには留学生も多く参加し、国際色豊かなディスカッションとなりました。また、セミナーを終え、夕食会に移動するまでの時間を利用してウプサラ大学の図書館であるCarolina Redivivaのガイドツアーを手配してもらいました。中世の書物も保管してある古い書庫（一般には非公開）を案内され、日本に関係のある古書を閲覧させてもらいましたが、「解體新書」の実物を見ることができたのも貴重な経験でした。電子ジャーナルの普及にともなう、大学における図書館の位置づけは大きく変わりつつあります。しかし、改めて古書を手にとり先人たちの努力と功績に思いを馳せると、身が引き締まる思いがしました。



ウプサラ大学でのセミナーの様子

3日の午前中は、Olof Rudbeck（リンパ系の発見者）が1663年に設立した解剖劇場（Anatomical Theatre）を見学した後、午後、ストックホルムに移動しました。明けて4日、午前中にカロリンスカ医科大学のキャンパス内にあるJSPSストックホルム研究連絡センターを訪問、阿久津秀雄センター長、川窪百合子副センター長からストックホルムにおけるJSPSの活動についてご説明いただきました。その後、緑につつまれたキャンパス内を徒歩で移動し、Cancer Center Karolinskaで合同セミナーにのぞみました。ホストのArne Östman教授は、前日までカロリンスカ医科大学で開催されたSwedish Cancer Meetingのオーガナイザーを務めた疲れも見せず、日本からの研究者を歓待してくれました。スウェーデンからはRichard Sandberg、Maria Kasper、Roland Nilssonが、日本からはプログラムに参加した若手全員が講演し、内容の濃いディスカッションが行われました。セミナー後、ガムラスタン（旧市街）のレストランでささやかな打ち上げをしましたが、その帰りに見たストックホルム市庁舎周辺の夜景の素晴らしさが印象的でした。

日程的にはやや強行軍となってしまいましたが、翌5日、最後の目的地であるルンド大学に向かいました。SJ2000という特急列車で4時間の長旅でしたが、車窓からは秋色を滲ませたスウェーデンの田園風景、美しい森や湖が目を楽しませてくれます。ホストのKristian Pietrasは30代でルンド大学教授に抜擢された気鋭の研究者です。かつてAstra Zenecaが研究所を構えていたMedicon Villageキャンパスに到着すると、なぜかポールにスウェーデン国旗と並んで日の丸が。。。我々を歓迎するためにKristianが気を利かせてくれたのでした。ルンドでは、これまでのセミナー形式とは趣向を変えて、ラウンドテーブルディスカッションを行いました。スウェーデンと日本から2名ずつ（Anna Andersson、Daniel Bexell、岡田、柴田）が口頭発表し、ここでも盛んなディスカッションがもたれました。日本からストックホルムやウプサラを訪れる人は多いと思いますが、ルンドに足を運ぶ人は少ないでしょう。しかし、ルンドは古い建物が多く残っている一方、学生が多く活気もあり、好感度の高い街です。医学部の規模はスウェーデンで2番目であり、サイエンスの水準も素晴らしいことを付け加えておきたいと思います。



最終日の朝、ルンドから海峡の橋を渡ってコペンハーゲンの空港へ向かい、帰国の途に着きました。全日程、好天に恵まれ、サイエンスだけでなくスウェーデンの美しい自然を満喫することができました。今回の巡回セミナーの期間はスウェーデンでは新学期にあたり、大学教員は多忙な時期ですが、留学時に共に研究をした仲間がよく助けてくれました。

我々が駆け出しの頃は、外国の学会に参加する機会は、ほとんどありませんでした。しかし、今回、参加した若手は国際学会の経験もあり、自分の専門と異なる分野の発表に対しても積極的に質問する姿は頼もしくもありました。巡回セミナーでは若手研究者の交流という目的も十分に

果たせましたが、若手だけではなく、同伴した私たちも大きな刺激を受けました。また、阿久津秀雄センター長と工藤奈津美国際協力員は全行程に同行してくださり、JSPSの活動も盛んに広報してくださいました。その反響は大きく、我々もスウェーデン側参加者からJSPSのグラントについて熱心な質問を受けました。

今回の事業はJSPSストックホルム研究連絡センターの全面的なバックアップのもと行われました。企画のスタートにあたって宮澤健夫前センター長、吉澤菜穂美前副センター長、実施にあたり阿久津秀雄センター長、川窪百合子副センター長、工藤奈津美国際協力員にたいへんお世話になりました。この場を借りて、御礼申し上げます。



ルンド大学でのディスカッションの様子



JSPSストックホルム研究連絡センターでの集合写真

## 「Sweden-Kyoto Symposium」に参加して

京都大学工学研究科 教授 榎木哲夫

2014年9月11日・12日の両日、スウェーデン・ストックホルムにおいて、京都大学とストックホルム大学、ウプサラ大学、ストックホルム王立工科大学（KTH）、カロリンスカ研究所との共催による国際シンポジウム「Sweden-Kyoto Symposium」を開催した。詳細は別途京都大学のホームページで紹介されているが、シンポジウム1日目は全員が参加しての式典や基調講演であり、2日目はスウェーデン側4大学の各キャンパスに分かれて、10の学術セッションが設けられ、それぞれのテーマ毎に参加者が集う分散・パラレルセッションが展開された。ここではその当初の企画の段階から携わり、且つセッションオーガナイザーを兼ねた一参加者としての立場から報告させていただきたい。

京都大学が全学を挙げて企画・実施する国際シンポジウムは、これで7回目になる。特に今回は、スウェーデンを代表する4つの大学群とのジョイントシンポジウムとなったが、このような企画をスウェーデンの大学同士が協力して進める機会はこれまであまり経験のないことと見受けられ、企画当初は多少の戸惑いもあったようだった。しかし辛抱強く交渉を続けることで、本シンポジウムの開催趣旨やその意義について理解を得ることができ、その後は非常に協力的に、一緒にシンポジウムを作り上げ、成功させようという気運が高まった。

実際に企画を進める中で、セッション構成には3つの方策が考えられた。ひとつは、既に相互連携が進行中の研究者が中心になって、そのネットワークを既存のものから拡大していくことを期してのセッション企画。ふたつ目は、それぞれの大学において、世界を牽引する最先端の研究を展開している学術分野であるものの、これまで共同研究の機会を見出せずにきた研究者に、その研究活動を知ってもらい、今後の国際共同研究に繋げていくことを期してのセッション企画。最後は、学術的な分野としても未だ創成期にあるために研究交流の機会に限られ、それが故に国際共同研究の形に展開しきれていないような萌芽的研究分野の開拓を期してのセッション企画、である。今回は、まず学内でセッション企画の応募を募り、その後、分野間バランス等を考えて上記の10の学術セッションにまとめてスウェーデン側と交渉を開始し、そこに先方からの意見を取り込みながらスウェーデン側からの参加者を募ってもらうことで企画が進行した。この段階で、本学の国際担当URA（リサーチ・アドミニストレーター）、国際企画課の粘り強い交渉による貢献が非常に大きかったと言える。

著者は今回”Human-Centered Design of Sociotechnical Symbiotic Systems”としてセッション企画を担当し、スウェーデン側コーディネーターのDr. Eva-Lotta Sallnäs Pysander（KTH）と共に具体的なプランニングを行った。上記のセッション分類で言えば、第3の萌芽的カテゴリーに該当する。

機械工学分野に所属する著者としては、スウェーデンからまず想起されるのは、自動車メーカーとして知られるボルボ社であり、特に同社のウッデバラ生産方式として著名な生産管理方式に見られるように、この地で世界的にも極めてユニークな生産文化が育まれていることを承知していた。すなわち、チーム生産方式や、作業における労働の人間化、人間性と生産性の向上を両立できる新しい生産方式を目指したもので、その精神はその後の日本における「ジャストインタイム生産方式（トヨタ生産方式）」にも引き継がれ、その発展型の「セル生産方式」として日本で完成されている。このように、技術と人、技術と組織の在り方において「人間中心（Human-centeredness）」の考え方をいち早く提案し、実践して来たのがスウェーデンを含めた北欧諸国であった。そこで本セッションでは、その対象を医療やロジスティクス（物流）分野、ロボティクス、ソフトウェアシステムにおけるプログラムのデザインやユーザインタラクションのデザインに拡大し、そこに通底する「人間中心のデザイン」について、両国の異なる文化からのレンズを通して交わることを目指し、企画を進めていくことになった。

まず、先述の企画趣旨のもとに京都大学側からのセッション参加者を募り、次いでスウェーデン側4大学にも同様の趣旨を伝え、取り纏めを依頼した。この結果、スウェーデン側3大学から、大変興味深いテーマとスピーカーの推薦が得られた。その選定の的確さは、企画提案者の立場から見ても驚異的で、極めて的を得た研究者を集めてもらうことができたと確信している。単に、問題の対象が共通というだけで集合した訳ではなく、社会やシステムを人間本意でデザインしていくための概念や哲学、そしてそのための最先端の方法論という観点から、互いの興味を共有し、更なる共同研究の機会を引き出すことのできる研究者が集う結果となった。通常の学会では滅多にお目にかかる機会がないと思われる分野からの研究者さえも含まれ、素晴らしい人脈を作り上げることができた（写真）。

種々のデータベースやホームページ等の整備が進み、他大学でどのような研究が展開されているかを容易に伺い知る機会が増えたとはいえ、やはり人が介在しないことには決して結びつき得ない研究者ネットワーク構築のスタイルがある。今回、このようなテーマ設定のもとに、両国の大学から研究者を巻き込んで集合できたことは、スウェーデンにおいても初めての機会であったようで、このような共催シンポジウムの開催意義の重要性を改めて実感する機会となった次第である。

最後に、シンポジウム開催にお力添えいただくとともに、大使公邸でのレセプションを主催くださった、JSPSストックホルム研究連絡センターの藤井義明 前センター長、

宮澤 健夫 前センター長、吉澤 菜奈穂美 前副センター長なら  
びに阿久津 秀雄 センター長、川窪 百合子 副センター長に、  
この場をお借りして、御礼申し上げます。

写真：

” Human-Centered Design of Sociotechnical Symbiotic Systems”  
の参加者

(前列左端がスウェーデン側コーディネーターの  
Dr. Eva-Lotta Sallnäs Pysander (KTH) 、前列中央が著者)



集合写真 (Photo: Eva Dalin)

## ウプサラの猫たち

東京工業大学 理事・副学長 辰巳敬

「研究者というのは猫のようなものだ。自分勝手に言うことを聞かない。好きなことだけをして群れることを嫌う」北欧最古の大学であるウプサラ大学のある先生が語った言葉である。こうした猫に例えられる研究者を集めて国際的な研究交流を促進すべく、東工大、ウプサラ大学、JSPSストックホルム研究連絡センター(以下、JSPS)主催の共同シンポジウムをウプサラ大学において9月16日から2日間にわたって開催した。東工大にとっては、特定分野ではなく物理、材料科学、環境、生命科学まで幅広い研究分野において全学を挙げて海外で実施する初のシンポジウムであった。

東工大は「世界最高の理工系総合大学」を目指して教育・研究の改革を加速している。教育改革については2016年4月より学部と大学院を一体として教育を行う新しい体制に移行すべく準備を進めており、研究改革については元素戦略研究センターや地球生命研究所などを開設し世界最先端の研究拠点(Hub)作りを行っている。教育、研究両面の改革において共通する考え方はグローバル化の推進である。世界最高の教育、研究を行うためには世界最高の大学・研究機関との交流を通じた切磋琢磨が不可欠であり、そのために東工大はすでに欧米、アジアの100を超える大学と学生交流や研究交流を行ってきている。

今回のシンポジウムはウプサラ大学と東工大の複数の研究者の交流に端を発している。これらの研究者たちを集めて横断的な全学シンポジウムを行うことにより、新たな研究交流や人的交流の機会が生まれるのではないかと期待を込めていた。ウプサラ大も学長をはじめ同オングストローム研究所の先生が中心になってご尽力いただき、1年近い準備期間を経て開催の運びとなった。

オープニングセッションではEva Åkessonウプサラ大学学長、三島良直東工大大学長及び阿久津秀雄JSPSセンター長のスピーチにおいて、両大学間の研究交流への期待が表明された。本セッションは材料科学、物理・核科学、ライフサイエンス、エネルギー政策、再生可能エネルギー、産学連携の6つのセッションからなり、研究活動から産学連携、資金獲得など幅広い分野での意見交換が行われた。クロージングセッションでは、研究者間の共同研究のMOUの締結や全学研究交流協定に向けたLOIの締結が行われ、2015年度にはシンポジウムを東工大で開催することや、より一層の協力関係の推進についてそれぞれ期待が述べられた。

初日の夜はJSPS主催、日本大使館後援のレセプションがボタニカルガーデンにおいて開催され、石塚英樹公使のご挨拶を頂戴した。シンポジウム終了後は植物の分類体系を確立したリンネ博士(ウプサラ大出身)ゆかりのリンネ公園内において夕食会を開催した。冒頭の「猫」発言はその時のもので、まとめ役のご苦労が滲み出てきたものと思う。2日間を通じて両大学の猫たちは自由闊達に意見交換を行い、今後の研究交流への大きな礎を築けたのではないかと考えている。

全日程を通じてウプサラ大学のきめ細かな準備や気配りは素晴らしく、まさにスウェーデン流「おもてなし」を実感した。次回は東工大にて開催する予定。その時までには両大学の猫たちがどのように化けていくのが楽しみでもある。

最後にJSPSストックホルム研究連絡センターならびに在スウェーデン日本大使館の皆様にご支援のお礼を申し上げます。

シンポジウムWEB SITE

<http://www.teknat.uu.se/research/uu-tt-joint-symposium/?languageId=1>



三島良直東京工業大学長によるスピーチ



細野東京工業大学教授による講演

## 第1回在フィンランド日本人研究者ネットワークミーティング

ヘルシンキ大学博士課程アッシリア学専攻 伊藤早苗

北海道大学ヘルシンキオフィスの発起のもと、JSPSストックホルム研究連絡センター、在フィンランド日本大使館、北海道大学ヘルシンキオフィスの共催で、フィンランドの大学、企業、研究機関等で働く日本人研究者の親交および今後の更なる研究促進や協働を目指し、2014年9月18日（木）17時から、ヘルシンキ中心街に位置するヘルシンキ大学文系キャンパスの教職員用カフェテリアを貸し切り、ネットワークミーティングの機会を持つことになった。各研究者の個人的交流のおかげで招待状が広く伝わり、主催者の予想を大きく超え、計45名が出席した。参加者の研究分野は言語学、歴史学、哲学、教育学、社会学、経済学、音楽学、芸術学、工学、建築学、情報科学、物理学、統計学、生物学、化学、神経科学、医学、歯学、薬学など幅広く、またそれぞれの学術経歴も博士課程在籍者からポストドク研究員、教授、医師、日本の大学の名誉教授兼フィンランドのFiDiPro (the Finland Distinguished Professor Programme) 教授に至るまで様々であった。トゥルクやタンペレ、ヨエンスーなど、ヘルシンキから遠く離れた都市や隣国ロシアからの出席者もいた。

当日はJSPSストックホルム研究連絡センターの川窪百合子副センター長が来芬された。ネットワークミーティング開始にあたり、川窪百合子副センター長、在フィンランド日本大使館の三輪芳明一等書記官、北海道大学ヘルシンキオフィス所長の田畑伸一郎教授からそれぞれ御挨拶をいただいた。挨拶の後、まずは関連する分野の研究者で着席し、軽食を楽しみつつ学術交流を行った。その後は分野を問わず情報交換を行った。会場ではJSPSストックホルム研究センターが発行する日本語ニュースレターや冊子、大使館主催のセミナーの案内なども配布された。約2時間のネットワークミーティング後、ヘルシンキ中央駅近隣のレストランに場所を移し、出席者の約半数が夕食を共にした。

出席者からは、これまでフィンランド在住の日本人研究者を対象にしたセミナーや交流会がなかったことから今回のネットワークミーティング開催を歓迎する声をたくさん聞くことができた。今後の日本人研究者の集まりや交流方法についてもいくつか提案があった。また今回参加できなかった方からも、第2回ネットワークミーティングが開催される際は出席したいという希望も聞くことができた。

このネットワークミーティングを開催するにあたり、今回縁のあった日本人研究者の連絡先を、今後のイベントの案内や情報の共有・提供を目的として在フィンランド日本国大使館が保管している。この連絡先リストは特段の指定がなければ、JSPSストックホルム研究連絡センター及び北海道大学ヘルシンキオフィスが共有している。リストに追加希望の方は在フィンランド日本国大使館 (culture@hk.mofa.go.jp) に直接御連絡ください。



## コラム ～Alla helgons dag—死者に祈りを捧げる日～

10月31日～11月6日の間の土曜日（今年  
は11月1日）、スウェーデンではAlla  
helgons dag（万聖節）とされている。この  
日は死者のために祈る日とされ、多くの  
人々が墓地のある教会を訪れ、亡くなった  
家族や知人を想いながら、蠟燭に火を灯す。  
これは、中世前期にできたカトリックの習  
慣（All Saints Day（11月1日）とAll Soul's  
Day（11月2日））に起源があり、プロテス  
タント諸国がこの祝日を廃止する中、ス  
ウェーデンにおいては、死者に祈る日とし  
て存続してきた。また、この日は、冬の始  
まりとも言われている。

当日は、多くの人々が墓地や教会を訪れ、  
死者に祈りを捧げていた。



Skogskyrkogården(森の墓地)の様子



Katarina Kyrka(カタリーナ教会)の様子

## その他打合せ・来会等

### 日本学術振興会東京本部から監査チーム来会(8月5日～7日)

日本学術振興会東京本部より、逸見一葉国際企画課海外センター係長、小松崎佑樹企画情報課システム管理係員、岡安芳主計課監査係員の3名が、実地監査のため当センターに來会した。監査概要についての説明を行った後、ヒアリングによる監査、会計相談、資産・金庫実査、会計書類監査、情報セキュリティ監査等様々な観点からの調査が行われた。当センターの活動内容を紹介すると同時に、センターの現状や日本との違い等、具体的な事柄を伝える良い機会となった。

### Cars幹子ストックホルム大学教育学部国際教育研究所上級講師他の来会(8月12日)

Cars幹子上級講師、Khaleda Gani Dutt博士課程学生が來会し、来年度開催企画中のESDシンポジウムについて説明があった。当センターからは、JSPSの事業について説明した。

### 宮園浩平東京大学医学部長来瑞(8月12日～16日)

宮園浩平東京大学医学部長が來瑞し、8月13日には阿久津センター長とともに、Anders Hamstenカロリンスカ医科大学長を訪問した。同大学からは、Hans-Gustaf Ljunggren研究評議会議長とUlrika Widegren科学コーディネーターも出席し、2014年9月4日に東京大学において開催予定の「ノーベルダイアログシンポジウム」についての打ち合わせ、カロリンスカ医科大学と東京大学医学系研究科との間での学生相互派遣についての議論、大学間交流についての意見交換が行われた。ハムステン学長訪問前には、当センターに來会し、現在計画中の大規模なフォーラムについて意見交換を行った。

8月15日には森元誠二在スウェーデン日本国大使館特命全権大使を表敬訪問し、医学系分野における日瑞の研究交流についての意見交換があった。



8月13日  
宮園浩平東京大学医学部長来会

### スウェーデン王立工科大学(KTH)との昼食会(8月19日)

KTHからは、Ramon Wyss国際関係担当副学長、牧淳人准教授、Torkel Werge国際関係アドバイザーが出席し、日本の大学との交流を促進したい旨、KTH側より話があった。当センターからは、阿久津センター長と川窪副センター長が出席し、9月22日、23日に開催予定のKTH Global Fairに当センターからブースを出展することが可能確認した。これにより、本イベントへの参加が決定し、9月22日の午後の部に、外国人特別研究員等のJSPS事業をPRするブースを出展した。当イベントには、留学に興味のあるKTHの学生100名以上が参加し、参加者は各国の大学・機関のブースを訪れ、留学に関する情報収集を行っていた。

昼食会後には、牧准教授の研究室を訪問し、研究内容、当センター主催のセミナーやシンポジウムについて情報交換を行った。



8月19日  
高木敏行東北大学流体研究所教授他2名の来会

### 高木敏行東北大学流体研究所教授他2名の来会(8月19日)

高木敏行教授、内一哲哉准教授、高奈秀匡准教授が來会し、スウェーデン王立工科大学(KTH)とのダブルディグリープログラムや、フランスとのCore to Coreプログラムをはじめとする同研究所の近年の活動について意見交換を行った。

## 加藤久JSPS東京本部国際事業部長他2名の来瑞(8月25日～27日)

2015年3月に開催予定のNobel Prize Dialogue Tokyo 2015に向けたノーベル財団との打ち合わせのため、JSPS東京本部より加藤久国際事業部長、安藤博同部国際企画課長、齋藤かおり同部同課特任職員が来瑞した。8月26日に行われた打ち合わせには当センターより阿久津センター長と川窪副センター長が出席した。

## 田畑伸一郎北海道大学ヘルシンキオフィス所長他2名の来会(8月27日)

田畑伸一郎北海道大学ヘルシンキオフィス所長と、田畑朋子同大学スラブ研究センター共同研究員、石倉香理同大学国際本部国際教務課職員が来会し、8月20日～9月5日の日程で実施された「第8回北海道大学フレッシュマンセミナー」の経過報告、及び、9～10月に北欧地域で開催予定のセミナーや交流会の紹介があった。その他、2014年3月に在フィンランド日本国大使館と当センターとの共催で実施したフィンランド同窓会会合や、北欧・バルト三国での関係構築について意見交換を行った。

## 宮澤恵二山梨大学教授他6名の来会(9月4日)

New Biology and Technologies in Medical Scienceで来瑞中の宮澤恵二山梨大学教授と今村健志愛媛大学教授が若手研究者5名とともに来会し、来瑞中のシンポジウムやセミナーの様子・成果について報告があった。当センターからは、JSPSの事業について説明した。

(p.3に当シンポジウムやセミナーの概要を、p.10に宮澤教授と今村教授による報告を掲載)

## Rasmus Gjedssø Bertelsenデンマーク・オオルボー大学助教の来会(9月8日)

2014年11月5日～7日に開催予定のワークショップ「Arctic Nexus in Asian-Nordic+ Relations」の情報提供及び協力依頼、2015年4月に富山で開催される北極科学サミット週間(Arctic Science Summit Week)について情報共有があった。これを受けて、11月5日のワークショップに、当センターから阿久津センター長と工藤国際協力員が出席した。

## 宮坂昌之大阪大学教授他2名来会(9月8日)

宮坂昌之大阪大学未来戦略機構特任教授が、同大学博士後期課程学生等とともに来会し、博士後期課程学生の研究活動について意見交換を行った。

## 辰巳敬東京工業大学理事・副学長他4名の来会(9月18日)

ウプサラ大学・東京工業大学合同シンポジウムで来瑞中の、辰巳敬理事・副学長、池上雅子大学院社会理工学研究科教授、岡村典研究戦略推進センター特任教授、村上道子人事課人事企画グループ事務職員(JSPS国際事業部人物交流課国際学術交流研修生)、伊藤陽世研究企画課研究企画グループ事務職員が来会し、当シンポジウムの成果と今後の計画について報告があった。

(p.4に当シンポジウムの概要を、p.14に辰巳理事・副学長による報告を掲載)



9月18日

辰巳敬東京工業大学理事・副学長他4名の来会

## 在フィンランド日本国大使館特命全権大使公邸での夕食会に参加(9月24日)

在フィンランド日本国大使館特命全権大使公邸において開催された夕食会に、阿久津センター長と川窪副センター長が出席し、日本ーフィンランド間の学術交流の活発化について意見交換を行った。夕食会前には、フィンランド同窓会ChairのKristiina Jokinenヘルシンキ大学非常勤教授及びテロ・サロマ北海道大学ヘルシンキオフィス副所長を訪問し、今後の同窓会活動について意見交換を行った。

## ウプサラ大学SciLifeLabの視察(9月30日)

阿久津センター長、川窪副センター長が、ウプサラ大学のSciLifeLabを視察した。Karin Forsberg Nilssonウプサラ大学SciLifeLab教授、Ulf Landegren教授、Stefan Bertilsson教授、Inger Jonassonゲノムセンタープロジェクトマネージャーによる同大学同機関の活動内容に関するプレゼンテーションの後、意見交換をし、施設見学を行った。



9月30日  
ウプサラ大学SciLifeLabの視察

## 石塚英樹在スウェーデン日本国大使館公使との面談(10月2日)

阿久津センター長、川窪副センター長が在スウェーデン大使館を訪問し、石塚英樹在スウェーデン日本国大使館公使と今後の協力案件について意見交換を行った。



10月2日  
石塚英樹在スウェーデン日本国大使館公使との面談

## 杉林堅次城西大学副学長・薬学研究科長・城西国際大学副学長の来会(10月8日)

杉林堅次城西大学副学長・薬学研究科長・城西国際大学副学長と佐野智子城西国際大学准教授が来会し、大学の国際活動と当センターの活動内容について意見交換を行った後、カロリンスカ医科大学構内を見学した。

## 渡辺恭良理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センター長他来会(10月15日)

2014年10月16日に、理研ライフサイエンス技術基盤研究連絡センター（CLST）とカロリンスカ医科大学SciLifeLabの共催シンポジウム「New Era of Life Science」を開催するにあたり、渡辺恭良センター長、Piero Carninci副センター長、嶋田庸嗣発生・再生科学研究推進室ライフサイエンス技術基盤研究推進室室長代理、薬師寺秀樹技師、伊藤美帆職員が当センターに来会した。理研のスウェーデンでの活動やシンポジウムについて説明があり、意見交換を行った。

(p.6に当シンポジウムの概要を掲載)

## 中西友子東京大学大学院農学生命科学研究科教授来瑞(10月12日～25日)

10月16日、来瑞中の中西友子教授が当センターに来会し、今回の来瑞の経緯や今後のJSPSとの協力関係について意見交換を行った。中西教授は今回の来瑞で、ヨーテボリのゲーテブルグ工学アカデミー（KVVS）、ウプサラのウプサラ大学及び農業科学大学、ストックホルムのSciLifeLab、ストックホルム大学、スウェーデン王立工学アカデミー（IVA）、放射線安全機関（SSM）、スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）を訪問し、講演や関係者との研究打ち合わせ等を行った。10月22日には、在スウェーデン日本国大使館森元誠二特命全権大使主催の昼食会に出席し、日瑞の研究協力について意見交換を行った。

10月22日にスウェーデン王立工学アカデミー（IVA）において開催されたセミナー“Radiation at our service”での講演の様子は、IVAウェブサイトで配信されている。（IVAウェブサイト <http://iva.se/seminarium/radiation-at-our-service>）



10月16日  
中西東京大学大学院農学生命科学研究科教授の来会

## ノーベルウィークダイアログについて

12月9日にストックホルムにおいて開催されるノーベルウィークダイアログの参加登録受付が9月下旬に開始したが、参加者が定員に達したため、登録受付は既に終了している。第3回目となる今回は、「The Age to Come」をテーマに、6名のノーベル賞受賞者を含む20名以上の著名な研究者や各界のエキスパートが出演し、パネルディスカッション等を行う予定である。当日の様子は、ウェブサイトにてライブストリーミング中継される。

ノーベルウィークダイアログ HP  
<http://www.nobelweekdialogue.org/>



## ノーベルウィークスケジュール決定

ノーベル財団が発表した2014年ノーベルウィークのスケジュールは以下の通り。

12月4日（木）

- Opening of the Exhibition Nobel Creations  
The Nobel Museum, 時間未定

12月5日（金）

- Nobel Foundation Press Conference  
The Nobel Museum, 10:00

12月6日（土）

- Press Conference for the Literature Laureate  
The Swedish Academy, 12:00
- Press Conference for the Medicine Laureates  
Nobel Forum, Karolinska Institutet, 14:00

12月7日（日）

- Press Conference for the Laureates in Physics, Chemistry and Economic Sciences  
The Royal Swedish Academy of Sciences, 9:00
- Nobel Lectures in Physiology or Medicine  
Aula Medica, Karolinska Institutet, 13:00
- Nobel Lecture in Literature  
The Swedish Academy, 17:30

12月8日（月）

- Nobel Lectures in Physics, Chemistry and Economic Sciences  
Aula Magna, Stockholm University 9:00

- Nobel Prize Concert

Stockholm Concert Hall, 19:00

12月9日（火）

- Nobel Week Dialogue  
Stockholm City Conference Centre, 9:30-17:00

12月10日（水）

- The Nobel Prize Award Ceremony  
Stockholm Concert Hall, 16:30

- The Nobel Banquet

Stockholm City Hall, 19:00

- The Nobel Day

The Nobel Museum, 11:00-18:00

12月11日（木）

- Royal Banquet Dinner  
The Royal Palace, 19:30

ノーベル財団 HP

<http://www.nobelprize.org/press/nobelfoundation/#/news/2014-nobel-week-in-stockholm-assistance-to-media-95546>

## 前スウェーデン王立科学アカデミー事務総長 旭日重光章受章

日本政府は、平成26年秋の外国人叙勲として前スウェーデン王立科学アカデミー事務総長で現在ウメオ大学名誉教授のGunnar Öquist氏に対する旭日重光章の授章を含む57名の授章を決定した。旭日重光章は、様々な分野における功績の内容に着目し、顕著な功績を上げた者を対象としている。今回の授章は、Öquist氏が日本・スウェーデン間の学術交流の促進に寄与したこと踏まえたものである。

Öquist氏は、2009年のKVA-JSPSセミナーの発足に深く関わられており、また、JSPS東京本部主催のHOPEミーティングには2011年より毎年講演者としてご協力くださっている。

HOPEミーティングHP  
<http://www.jsps.go.jp/hope/>

## スウェーデンのダブルディグリープログラム支援

The Swedish Foundation for International Cooperation in Research and Higher Education (STINT) は、学部レベル・大学院レベルを含むスウェーデンの高等教育機関での教育の国際化と改善を図る事を目的として、スウェーデン国外の高等教育機関との新たな教育的協力を対象とした補助金「Grants for Double Degree Programmes」を設けることを発表した。本補助金は、同機関が高等教育の発展に重要と位置付けているダブルディグリープログラム導入を含む教育プロジェクトが対象となっている。

申請対象者はスウェーデンの大学の学部長または新しい教育プロジェクトの責任者と同等の者で、プロジェクトの

期間は最長で3年間、最高で750,000スウェーデンクローナ（約1千万円）を支給する。

同補助金への申請は、2014年11月に始まっており、2015年2月3日が同年開始分の申請期限となる。採用者は、8月までにプロジェクトを開始することとなる。

STINT HP

[http://www.stint.se/en/scholarships\\_and\\_grants/grants\\_for\\_double\\_degree\\_programs](http://www.stint.se/en/scholarships_and_grants/grants_for_double_degree_programs)

## ウプサラ大学が東京で同窓会イベントを開催

スウェーデン王立男声合唱団「オルフェイ・ドレンガル」の日本でのコンサートツアーの機会に、ウプサラ大学は、大阪・東京で同大学の同窓生と支援者を対象としたレセプションを開催した。2014年10月20日に、駐日日本スウェーデン王国大使館において開催されたレセプションには、平日の夜にも関わらず、180人もの参加者が出席し、同大学の同窓生でもあるMagnus Robach駐日スウェーデン大使が、同大学が良い例となることを強調しつつ、日本とスウェーデンの連携の重要性について語った。

同レセプションでは、三菱商事がウプサラ大学に対して、357,000スウェーデンクローナ（約560万円）を寄付したことが発表された。現在、ウプサラ大学は日本の8つの大学（慶応大学、上智大学、京都大学、東北大学、九州大学、東京大学、名古屋大学、早稲田大学）との交換留学プログラムを実施しているが、当寄付は、2015年から2016年の間にこの交換留学プログラムを利用する学生への奨学金に充てられる予定である。

同大学は、9月のスウェーデン-京都大学共催シンポジウム（p,12に報告を掲載）や、東京工業大学との合同シンポジウム（p,14に報告を掲載）など、日本の大学とのシンポジウムを数多く開催している他、3月の京都大学音楽研究会ハイマート合唱団を招いたコンサートや6月～9月の華道をテーマとしたイベント「Ikebana and Contemporary Plant Art in the Botanical Garden」（6月14日～9月14日）等、文化面においても、日本との交流イベントを開催している。

ウプサラ大学HP

<http://www.uu.se/en/media/news/article/?id=3833&area=2,7,16&typ=artikel&na=&lang=en>

<http://www.uu.se/en/media/press-release-document/?id=2432&area=3,8&typ=pm&na=&lang=en>

## フィンランド 就学期間が長い国

2014年9月に公表された図表でみる教育（Education at a Glance）OECDインディケータにおいて、フィンランドの国民の就学年数が、他のOECD加盟国よりも長いことが判明した。（同統計は、2012年のデータを基に作成されている。）同統計によると、フィンランドの15～19歳の国民が教育機関に所属している率は86%と、平均より高い。高校卒業後すぐに高等教育機関に入学するケースが限られているため、19歳の国民が教育機関に所属している率は、平均よりも低いものの、20歳～29歳は40%となっており、これは、デンマークに次いで二番目に高い。これにより、若い

世代に対する高度な教育が行われていることが考えられるが、同時に、若い世代の教育機関からの卒業が他の国々よりも遅いということも考えられる。フィンランドでは、現在、国民が労働市場に参入する時期が遅くなっていることが問題となっている。

フィンランド 教育文化省 HP

<http://www.minedu.fi/OPM/Tiedotteet/2014/09/EAG2014.html?lang=en>

## デンマーク政府 2015年の研究・開発経費の割り当てに合意

デンマーク政府は、2015年の計85億7千万デンマーククローナ（約1千7百億円）の研究経費の配分について、国民議会の全政党より合意を得た。

今回合意のあった内訳案は、経済成長や雇用の促進に直接つながる分野の研究のみならず、他の重要な分野の研究も視野に入れられている。特に、精神医学と教育に関する分野には多くの予算が割り当てられている。精神医学については、精神疾患の深刻化により、身体的な医学分野と同等の基盤を固めるべきとされている背景が大きく影響して

いる。また、教育に関する分野では、特に、子供の環境に応じた多様な教育形態に関する研究等が注目されており、社会の脆弱性を補うだけでなく、良質な教育と託児制度の充実につながるものと考えられている。

デンマーク高等教育科学省 HP

<http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2014/agreement-on-distribution-of-research-and-innovation-funds>

## ノルウェーリサーチカウンスル 新たな戦略を検討中

ノルウェーリサーチカウンスル（RCN）は、2015年～2020年の同機関の活動の指針となる新たな戦略を検討している。同戦略は、2015年のはじめには確定する予定だが、10月中旬～11月初旬にかけて、執行委員会が作成した案をウェブサイト等で公開し、メール等で社会全体の意見を聞く機会を設けた。Arvid Hallén RCN長官は、研究・貿易・産業などの団体や社会全体と協議しながら戦略を策定していくことが重要という点を強調している。

本戦略案は、官民両セクターに対してより革新的で、かつ、すべての分野において持続的な社会を作るという根本的な社会の課題の出発点となるもので、以下の6つの領域に分かれた戦略が描かれている。

- ・先駆的な研究や開発への投資を増やすこと
- ・貿易や産業にとどまらず、社会全体にとって持続可能な解決策を促進する研究を強化すること
- ・研究指向型で、革新的な貿易、産業を促進するイニシアティブを強化すること
- ・公的部門が、研究を近代化の取組に応用できるようにすること
- ・国際協力やEUの資金による研究への参加を促進すること
- ・研究システムの統合とリニューアルにより、戦略的な役割を担うこと

ノルウェーリサーチカウンスル HP

[http://www.forskningsradet.no/en/Newsarticle/The\\_Research\\_Councils\\_new\\_main\\_strategy\\_circulated\\_for\\_review/1254001010440/p1177315753918](http://www.forskningsradet.no/en/Newsarticle/The_Research_Councils_new_main_strategy_circulated_for_review/1254001010440/p1177315753918)

## NordForskが保健福祉に関する研究への助成を発表

NordForsk（北欧研究会議）は、スウェーデン、アイスランド、リトアニア、エストニアの学術研究機関（The Swedish Governmental Agency for Innovation Systems (VINNOVA)、the Icelandic Centre for Research(RANNÍS)、the Research Council of Lithuania (LMT)、the Estonian Research Council (ETAg)）との協力の下、北欧・リトアニア・エストニアの大学や研究機関に所属する研究者または研究グループを対象とした助成を行うことを発表した。

本助成は、北欧及びバルト三国での公衆衛生の課題をユーザー主導型の取組みによって改善することを目的に

発足したもので、2～4のプロジェクトに合計で1千百万ノルウェークローナ（約1億9千万円）が支給される。対象となるプロジェクトの期間は2～3年であり、最高で6百万ノルウェークローナ（約1億円）の申請が可能となっている。

NordForsk HP

<http://www.nordforsk.org/en/funding/utlysninger/funding-for-nordic-baltic-research-projects-on-user-driven-innovation-in-health-and-welfare>

## “KI Bladet” ~2014 NO.3~

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学では、“KI Bladet”という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。

KI Bladet <http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning>

## ハムステン学長の構想: Strategy 2018の始動

大学の5か年計画である「Strategy 2018」が、いよいよ実行段階に入り、ハムステン学長は、職員一人一人の意識と努力が、この計画の成功に必要な不可欠であることを強調しつつ、以下について語っている。

### 国や県議会と大学との協力体制について

ハムステン学長は、スウェーデン政府が発表したALF協定(The new National Agreement on Medical Education and Research: 特に、臨床や基礎研究から応用分野におよぶ医学系教育に対して県議会がどのように協力すべきかを、政府が明確化したもの。)についても触れ、これにより、ストックホルム県議会との協力体制ができ、教育と研究については医科大学が、医療については医療施設が責任を担うという構図が明確化したと述べている。

### 職員へのアンケートについて

職場環境、改善点、組織やリーダーシップについての意見を集めることを目的とした調査を、KI職員全員を対象に行った。それに対してハムステン学長は、職員全員が回答すべきと述べ、最良な職場環境を共に構築することへの第一歩として重要であるとの見解を示している。

### 新Deputy Vice-chancellor of innovation and corporate alliancesの就任について

ハムステン学長は、上記役職に就任したAlexander von Gabain教授を紹介し、前職の欧州工科大学(EIT: European Institute of Innovation and Technology) Chairとして携わった、研究・教育・ビジネスの統合を目指した取組み「知の三角形(Knowledge Triangle)」での功績に触れ、同教授の今後の活躍への期待を述べている。

なお、9月15日には、Strategy 2018についての情報会議が開催され、ソルナキャンパスでは650人、フッディングキャンパスでは200人の職員が集まり、ハムステン学長による詳細な説明を聴講した。

## 新たな研究所の建設について

現在建設中のBiomedicum研究所では、内部組織について着々と検討が進められている。本研究所はCollaborationを合言葉に、異なる部門間の壁をなくし、新たな手段を開拓することを目指している。現在は、地面に穴が開いているだけの状態だが、2018年には、延床面積63000㎡の建物が完成し、1700人の研究者とスタッフを収容する予定である。同建物には、以下の5つの部門が移転する予定である。

- Department of Microbiology, Tumor and Cell Biology
- Department of Physiology and Pharmacology
- Department of Cell and Molecular Biology

- Department of Medical Biochemistry and Biophysics
- Department of Neuroscience

## KIの大規模公開オンラインコース開始 世界から多くの登録

2014年9月9日、KIが「edX」というMOOC (Massive Open Online Course) を提供するインターネットサイトにおいて、授業の提供を開始し、5万人を超える参加者が、履修登録を行った。

MOOCとは、「edX」や「Coursera」等のプラットフォームと呼ばれるサイトを通して世界中の高等教育機関がネット上に無料で授業や講義を公開する大規模なオンラインコースの総称である。今回KIが授業を提供した「edX」には、36大学が授業を提供しているが、これは、スウェーデンの大学では初の試みである。

## 選挙イヤー: 残された2つの選挙

2014年6月に、3つの評議会 (Board of Higher Education, Board of Doctoral Education, Board of Research) の議長(Dean)と副議長(Pro-Dean)が決定したばかりのKIだが、以下の選挙が残っている。

### University Board の教員代表選挙 (任期: 2015年~2017年)

KIの重要事項を決定する最高決定機関として、University Boardが存在する。同組織のメンバーは、KI学長・副学長の他、政府・教員・学生からの代表で構成されている。上記のうち教員の代表 (Representatives of the teaching staff) を決定する選挙が、9月30日に終了し、Elias Arnér教授 (再選)、Anna Karlsson教授、Lena Von Koch教授が当選した。

### 3つの評議会の評議委員選挙 (任期: 2015年~2017年)

評議会には、KIから各6名の評議委員 (Board Member) が選出される。11月6日に各12名、計36名の候補者が発表され、12月には投票が行われる予定である。

## 事業のご案内

### 二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者（若手研究者を含む）が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。平成27年度（2015年度）分募集要項（2月締切分）をJSPSのHPにて公開中です。

[http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei\\_bosyu.html](http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei_bosyu.html)（日本語版）

<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/call.html>（英語版）

### 外国人特別研究員事業

#### 1) 一般&欧米短期 (JSPS Postdoctoral Fellowship (Standard & Short-term))

本事業は、諸外国の若手研究者に対し、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供する事業です。

平成27年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

<http://www.jsps.go.jp/j-fellow/>

また、スウェーデンからの平成27年度（2015年度）分申請受付を近日中に開始いたします。御関心のある方は是非以下のホームページをご確認ください。

JSPSストックホルム研究連絡センター HP

<http://www.jsps-sto.com/jspsfellowships.aspx>

#### 2) JSPSサマープログラム (JSPS Summer Program)

本プログラムは、外国人特別研究員事業の一環として、欧米主要国の博士号取得前後の研究者を、夏期2か月間、我が国に招致し、我が国の文化や研究システムに関するオリエンテーションと日本側受入研究者の下での研究機会を提供するものです。

平成26年度よりスウェーデンも申請対象国となり、10名のスウェーデンの若手研究者が本プログラムに参加しました。平成27年度（2015年度）分の申請が近日中に開始しますので、御関心のある方は以下のホームページを御確認ください。

STINT（推薦機関） HP

<http://www.stint.se/en/>

JSPSストックホルム研究連絡センター HP

<http://www.jsps-sto.com/fellowship-summer.aspx>

日本学術振興会（東京本部）JSPSサマープログラム HP

（本プログラムの概要・参加者からの声を掲載しています。）

<http://www.jsps.go.jp/j-summer/>

## そ の 他

### カロリンスカ医科大学同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx?AcceptsCookies=yes>

### JSPS Stockholm News Letterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを [jspss-sto@jspss-sto.com](mailto:jspss-sto@jspss-sto.com) までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真：Alla helgons dag（11月1日）のSkogskyrkogården(森の墓地)の様子

冬の始まりと言われるだけあり、この日は前週よりも肌寒く感じられたが、たくさんの蝋燭と集まった人々のせいか墓地内ではあたたかさを感じ、自然と心が落ち着いた。（撮影 工藤奈津美）

JSPS Stockholm News Letter 第44号

編集長：川窪 百合子

編集：工藤 奈津美

発行日：2014年11月26日

発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先：JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561 FAX: +46 (0) 8 31 38 86

Website: <http://www.jspss-sto.com/> E-mail: [jspss-sto@jspss-sto.com](mailto:jspss-sto@jspss-sto.com)

**JSPS**  
STOCKHOLM